感　　謝

高　桑　良　興

往昔哺乳類は爬虫類と大闘爭をして今日の様に優位を獲たものであるから，今でも人は蛇などを見れば直になぶり殺すという如き宿命的怨恨を持つているのだと尤もらしい事が言われもするが，さて百足はどんなわけかは知らぬが之も亦嫌忌され身振いせられ，見つけらるれば大抵は無難なるを得ぬ。これは日本人にのみではないと見え，小泉八雲の西印度の記事やスタール博士の旅行記に嫌惡の相がまざまざと描かれておる。我國の三上山，日光などの說話には体長幾丈，頭に角があるなどと如何にも獰猛なものとして取り扱われ，彼らには誠に氣の毒である。馬陸に至つては我國には餘り大きなものが居らず又咬むこともなく動作も鈍い等の爲か，百足ほどに憎まれぬが外形は必ずしも美わしくはなく，予は曾て中國廬山で始めて萬年筆ほどの巨大な奴を足近に見て，直に手を出すのをためらつた事程醜惡の相貌を示している。彼らは等しく動物界の一員として生を享けながら斯く人に嫌われ，世界の三大國の一として最大の誇りを持つていた大正昭和の盛時にすら學者によつて取り殘され，動物專門書にさえ僅かに數行を惜與？せられたにすぎぬは，昆蟲の如くに大量殺戮の難を免れて彼らには幸であつたであろうが，昆蟲と肩を竝べる程の地位にありながらそのまゝ放つて置かるべきものではない。成るほど直接人の利害には關係は薄いようだが，元來萬物は人の爲に生まれ出たものでないが或は將來如何に利用せられるかも知れず，又或は已に人間と深い關係があるが未だそれと感づかれておらぬのかも知らぬ。それはともかく右學問上の缺陷を見て決然奮起したなどと厚かましい戲談は申さぬが，予は曾て某誌に述べた如き動機により今を距たること二十七八年前より，先進の國々に倣いせめて我國の種類だけでも調べようと不敢當ながら聊か手を染めておる內に大戰が突發して挫折し，老頽も伴つて直接の仕事を續けることが出來なくなつたのは殘念至極に思う。特に「日本倍足類」が僅かに原稿を殘し印刷半で戰火の奪う處となり，今はその更生を期することが出來ない爲特に深く哀愁を覺えているのである。然るに本誌には福井會頭，高島幹事の御厚意により予の馬齢に因んで特別號を三回に亙り發行

せらるゝは，光榮を通り越し會員諸友には誠に面目もなく申譯のない感じがする。只幸なるかな，予に續いて熱心なる研究者が起り懸命の努力を以て着々業績を擧げており誠に歡喜に堪えぬ。次にその主なる方々を擧げて感謝を表する。尙予よりも以前に日本の多足類に手を着けたは一二の外人と岸田久吉さんであつた。

小川一男氏　（濱松北高校，主として染色体）
篠原圭三郎氏　（埼玉松山高校，主として唇足類）
高島春雄氏　（山階鳥類研究所）
芳賀昭治氏　（東京在住，主として倍足類）
三好保徳氏　（愛媛松山北高校，予の直繼，論文多し）
村上好央氏　（愛媛大島中學，主としてゲジ發生）

尙又北米に四人，南米に一人知友を得，その內又一人は頗る熱心な中國人である。

蜈蚣の化石につき一言附記する。天保年間版「東海道名所圖會」卷二に近江國栗太郡山田に山田石亭という人あり，奇石二千餘を集め云々とてその繪をも示され中に蜈蚣石というのがあり濃州金山產とある。予それを見るにヂムカデが石に痕をとめた化石のようである。尤も實物を檢したわけでない故本体は或はヤスデ若しくはゴカイの類かも知れぬが。美濃赤坂邊の石灰山などには種々化石が產するからその邊から出たものか。面白いことゝ思つたまゝ。